

## 2015年 学部内研究会・セミナーなどの活動

### 1. 2015年度 環境科学セミナー

本年度環境科学セミナーは以下の5回が実施された。

#### 開催概要

第1回 2015年5月8日(金) 16:30～18:00 環境科学部会議室(参加者62名)

「Social production of habitat. A myth or just a disappointment?」

Carlos Gallego Alonso (Architect, Senior Program Manager AECID, Philippines)

第2回 2015年6月1日(月) 13:00～15:00 環境科学部会議室

「Research in innovative Wastewater, off-gas and Solid Waste treatment technologies at the Environmental Technology Group of Valladolid University」

Dr. Raúl Muñoz (Valladolid University, Professor)

「Novel Biotechnologies for Air Pollution Control」

Dr. Raquel Lebrero (Valladolid University, Assistant Professor)

第3回 2015年7月29日(水) 10:40～12:10 環境科学部会議室(参加者27名)

「閉鎖型植物工場における連続光の利用」

畑 直樹(生物資源管理学科助教)

第4回 2015年9月17日(木) 13:00～15:00 環境科学部会議室

セミナータイトル：ダムを壊す選択とダムを活かす挑戦

「ダム撤去の現状とガバナンス過程－熊本県球磨川の荒瀬ダム撤去」

大野智彦(金沢大学人間社会研究域 准教授)

「ダム開発後の参加型農業用水管理－インドネシアビリビリダムを対象に」

平山奈央子(環境政策・計画学科 助教)

第5回 2015年12月18日(金) 15:00～17:00 環境科学部会議室(参加者32名)

セミナータイトル：琵琶湖と流入河川における魚類と環境

「魚類と琵琶湖水位のかかわり」

遊磨正秀(龍谷大学理工学部教授)

「流入河川・農業排水路における魚類と環境」

大久保卓也(生物資源管理学科教授)

#### 講演概要

「Social production of habitat. A myth or just a disappointment?」

Carlos Gallego Alonso (Architect, Senior Program Manager AECID, Philippines)

The close relationship between urban space and housing production should be a given factor in today's complex world. The concept of social production of habitat is one of these ideas that could easily match into the boundaries of this battle field between production of housing and urban space. This lecture did try to go through this exciting concept, SPH, mainly with the support of some cases identified and classified in the last years in different countries, trying to identify a common pattern.

「Research in innovative Wastewater, off-gas and Solid Waste treatment technologies at the Environmental Technology Group of Valladolid University」

Dr. Raúl Muños (Valladolid University, Professor)

#### 「Novel Biotechnologies for Air Pollution Control」

Dr. Raquel Lebrero (Valladolid University, Assistant Professor)

排水の生物処理に関する最新研究事情について、スペインのバジャドリド大学のムニョス教授とレブレロ助教に講演いただいた。ヨーロッパは有機廃棄物の嫌気発酵処理が普及しており、汚物の生物処理によるコスト低減やバイオマス資源として再利用するための研究がすすんでおり、それらの新しい技術が紹介された。

#### 「閉鎖型植物工場における連続光の利用」

畑 直樹(生物資源管理学科助教)

近年、人工光型植物工場(閉鎖型植物工場)への関心が高まっている。閉鎖型植物工場においては、種々の環境調整を行うことで、効率的な作物生産が可能であると期待されている。本セミナーでは、畑先生より、昼の長さである日長の操作、とりわけ24時間日長(連続光)の利用について紹介していただいた。

#### 「ダム撤去の現状とガバナンス過程－熊本県球磨川の荒瀬ダム撤去」

大野智彦(金沢大学人間社会研究域准教授)

2014年に水循環基本法が成立するなど、流域を単位とした森川里海の水・物質循環の重要性に関心が集まっている。そのような状況の中、熊本県球磨川では2012年から日本初の大型ダム撤去が行われている。本報告では、このダム撤去の実現に至るガバナンス過程を、利益・制度・アイデアの3つの視点に着目し、水利権更新に際して地元からの撤去要望があり2002年12月に知事がダム撤去を表明した第1期(～2002年)、2010年からの撤去に向けた検討を行った第2期(2003～2008年)、知事の交代によって撤去凍結表明とそれに対する地元の抗議があり、再び撤去表明が行われた第3期(2008年～2010年)、において、関係者の主張や関係者間の働き掛けに関する調査・分析結果が紹介された。

#### 「ダム開発後の参加型農業用水管理－インドネシアピリピリダムを対象に」

平山奈央子(環境政策・計画学科助教)

ダム建設後、受益者自身が関連施設の利用や管理に関わるPIM(Participatory Irrigation Management・参加型灌漑管理)の考え方が着目されている。インドネシア南スラウエシのピリピリダム灌漑受益地域では、管理方法の問題によって末端水路まで十分な水量を配水できていない。本報告では、水管理関係者のコミュニケーションによって配水状況を改善できないかとの問題意識より、乾季作中の水路やゲートの管理のための関係者のコミュニケーションと水田の湛水状況調査の結果を紹介された。コミュニケーションの詳細を確認すると、水不足地域において農民から末端水路管理者への要望が集中していることや関係者間をつなぐキーパーソンの存在を確認することができた。

#### 「魚類と琵琶湖水位のかかわり」

遊磨正秀(龍谷大学理工学部教授)

#### 「流入河川・農業排水路における魚類と環境」

大久保卓也(生物資源管理学科教授)

琵琶湖における貝類を含めた漁獲量は、1970年前後には6000～8000 t/年であったものが、2010年前後には1600～1800 t/年まで激減している。この原因としては、湖岸の人工護岸化、河川改修、堰堤や取水堰による魚類の移動の分断、水位の人為的管理、ブラックバス等の外来魚の侵入の影響などが指摘されている。しかし、魚類と環境との関係については、影響因子が多いため科学的な解明が難しいのが現状である。今回は、それぞれの講師が取り組んでいる魚類と環境の関係に関する研究の現状について報告していただいた。

## 2. 国際環境マネジメント

### 「国際環境マネジメント」 ～ボゴール農業大学での国際フィールドワーク科目の実施～

湯川 創太郎

地域共生センター研究員

#### 1. はじめに

「若者の内向き志向」、2014年の環境科学部報の国際環境マネジメントに関する記事でも、この言葉を記事の書き出しとしたが、若者が内向きであると世の中で認識されている状況はあまり変化していないように思われ、ネット上では、内向き志向が示されたとするアンケート調査結果を紹介した新聞記事などが紹介されていたりする。一方で、たとえば留学生数の数字などは、最も留学生数が多かった1990年代後半～2000年代前半に比べると少ないものの、それ以前の1980年代に比べればはるかに多いし、ごく最近のデータでは微増に転じている(文部科学省のウェブサイト[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm)に数字が挙げられている)。若者人口の減少を考えると、数字で表れている傾向は、若者自身の要因とは言い難く、むしろ徐々に積極的になっているのでは、という感も受ける。

他方、統計数字をひも解くと、経済社会の国際化が急速に進み、国際化に対応した人材が多く必要になるという点も見えてくる。UNCTAD(国際連合貿易開発会議)の統計によれば、2014年の日本の海外直接投資、すなわち日本企業が海外に向けて行っている投資額は1136億ドルで、これは、1980年の数値の50倍に相当するという。資金の流れが活発化すれば、人の流れも活発化するわけで、「徐々に積極的になっている」以上の「外向き指向」を社会が若者に求めているのもまた事実である。また、海外での企業活動に留まらず、世界で何が起きているのかを理解し、適切な判断が出来る人材を日本は必要としている。本科目「国際環境マネジメント」は、こうしたニーズに対応するための科目と位置付ける事ができるかもしれない。

#### 2. 本年度の科目設計

本科目は、環境省の「環境人材育成のための大学教育プログラム開発事業」の一環として2010年に行われた、滋賀県内における試行プログラム、2011年にベトナム、ダナン大学で行われた試行プログラム(「地域再生システム論」として単位認定)を基礎とし、2012年度より人間学科目として本格実施に至ったものである。2012年度は、タイ、ウドンタニラジャパッド大学で5日間のプログラムを実施し、その後2013年度にはベトナム、ダナン大学で9日間のプログラムを実施している。2014年度にはバングラデシュでのプログラムを計画していたものの現地の治安状況の悪化により中止となり、2015年度の実施は、海外で行うプログラムとしては4回目、「国際環境マネジメント」としては3回目の実施である。

今回の実施場所は、インドネシア共和国、ジャカルタ郊外のボゴールという都市にある、ボゴール農業大学(IPB)である。本学とは病害虫研究などを通じた交流があり、環境科学部とは2014年度より学部間協定が結ばれている大学である。スケジュールは下記のとおりである。

	スケジュール	宿泊地
1日目：9月20日(日)	○日本⇒ジャカルタ・スカルノハッタ国際空港 夕刻IPB(ボゴール農業大学)へ	IPB※
2日目：9月21日(月)	○オープニングセレモニー／講義 ○チボダス植物園へ移動 ○夜、グループディスカッション	チボダス
3日目：9月22日(火)	○終日西ジャワ州内を移動 ・チボダス植物園見学 ・ヌサンタラフラワーガーデン見学 ・バンドンへ移動し、アンクルン小屋(竹楽器の紹介、実演)見学	バンドン

4日目：9月23日（水）	○バンドンからボゴールへ移動 ・ジャティフルダム見学 ・ジャティサリ病害虫予察センター見学 (いずれもプルワカルタ周辺)	IPB
5日目：9月24日（木）	○ボゴール市内でのフィールドワーク ・ボゴール植物園見学 ・エコフノポリー（環境問題を題材としたボードゲーム）制作現場 見学 ○グループディスカッション	IPB
6日目：9月25日（金）	○日本、インドネシアの先生による講義 ○IPB 学内の見学 ○グループディスカッション	IPB
7日目：9月26日（土）	○グループごとにグループディスカッションをもとにしたプレゼン テーション ○ボゴール市内のチナンネン観光村見学、同地で修了証書配布	IPB
8日目：9月27日（日）	○ボゴール市内の見学	IPB
9日目：9月28日（月）	○IPB よりバス、車にてジャカルタ・スカルノハッタ国際空港へ行 き、その後空路にて日本へ	IPB

※ボゴール農業大学には学生向け、教員向けのゲストハウスがあり、学生、教員はそこに宿泊した。

本年度の本科目の特徴として、インドネシアの農業とそれを取り巻く文化や環境の問題が取り扱われることとなった。これまでの国際環境マネジメントが、日本とアジア各国の下水道処理、街路における廃棄物処理など、環境問題における静脈部分を取り扱っていたのに対し、今回は国の主力産業という動脈部分に焦点を当てた内容設定である。このため、グループディスカッションの内容も、地域環境問題の解決方法を議論した前回までに対し、両国の植物・農業や、それを取り巻く文化についての紹介、議論が中心となった。



5日目：エコフノポリー制作現場見学の様子



7日目：プレゼンテーションの様子

### 3. こぼれ話

これまでの国際環境マネジメントは、タイ・ベトナムという仏教文化圏で行われたのに対し、今回は、人口の75%がイスラム教徒であるという、宗教的に異なる文化圏で実施された。イスラム教では、1日5回の礼拝、豚肉・酒のタブー、断食月中の日中の断食といった戒律がある。この事は、プログラムの中でも反映され、食事は牛肉・鶏肉を中心としたもので、酒類はなく、インドネシア側の教員の方は決まった時間に礼拝の為に席をはずしていた。街中では定期的にお祈りの時間を告げるアザーンが流れ、酒類を販売する店舗は極めて限られていた（ビールを見かけたのは大きなスーパーマーケットだけである）。また、プログラム開催中の9月23日は犠牲祭（イード・アル＝アドハー）というイスラム教の祝祭日で、フィールドワークの道中ではこの日に神にささげるヤギや牛の姿を多数目撃した。私はインドネシアの隣国で、同じくイスラム教徒の多いマレーシアに3年近く滞在しているので、こうした光景はむしろ当たり前であるのだが、学生の皆さんも大きな違和感もなく順応されていたように感じた（現地の先生方が丁寧に説明されていた事もあると思われるが）。日本の学生からはフィールドワー

クに参加されたインドネシアの学生からイスラム教の基礎を学び、国内の報道などから感じてしまうような危険な宗教ではない(※)、という実像が分かった、という感想もあり、実習の内容以外でも多くの学びがあったのでは、という印象を受けた。

国際交流科目のもう一つのキーポイントである外国語に関しては、今回は至ってスムーズであった。これまでの開催国であるベトナムやタイの言語は声調言語(イントネーションで意味が変わる言語、中国語が代表的)で、どうしても訛りが強くなり聞き取りにくくなる傾向があるのに対し、インドネシア語は非声調言語で、英語を話す際にも日本人にとって聞き取りにくくなる部分、或いは日本人が話す英語でインドネシア人が聞き取りにくくなる部分が少なかったようだ。尚、学生や先生以外の地元の人にはあまり英語を話せず、その際にはインドネシア語でのコミュニケーションが必要になった。マレーシアに3年滞在し、インドネシア語と90%同じと言われるマレーシア語を若干学んだ事のある私は、簡単な挨拶をこなす程度の実力であるが、Ayam(鶏、鶏肉)、Bunga(花)、Terima Kasih(ありがとう)などの言葉は日本人学生も憶えたのではないかと考える。

なお、私自身の専門は環境経済学と交通経済学であり、環境経済学の知識を用いてフィールドワークやインドネシアの講師の先生の講義の補足説明を行っていくとともに、インドネシアの交通事情についての概説講義を行った。講義内容は日本人学生を主たる対象にしたものであるが、インドネシア側の学生にも関心を持ってもらえたのは意外であった。日本では農学部で交通政策が取り扱われることは稀であるが、インドネシアでの「農学」は、広大な地方部の地域開発や大規模プランテーションに代表される大きなインフラストラクチャーの構築・運営も任される学問であり、調べてみると地域のバス交通などを研究で取り扱っている先生もいる。日本と海外の学問領域の差異を強く意識出来たのは新鮮な体験であった。

※：イスラム教とテロリズムの関係は複雑である。大部分のイスラムは平和を重んじるが、一方で暴力を厭わない宗教指導者もいる。ただし、中世のヨーロッパのキリスト教や日本の仏教の指導者が戦争を厭わなかった事を考えれば、これは宗教的特性と言うより、イスラム教を信仰する人が多い地域に政情不安定である地域が多いという地域的な問題に起因すると考えたほうがよいと思われる。

○開催地・ボゴール農業大学の位置

・広域図



・ジャワ島内での位置



# 国際環境マネジメント 参加学生レポート I

藪田 暢也

環境科学部生物資源管理学科

私にとって国際環境マネジメントのプログラムは空港から始まった。国際環境マネジメントでは日本で一度全員集まってから出発するのではなく、各人がそれぞれ別々に現地に向かい、現地全員集まるというものだった。今回、私は関西国際空港からインドネシアに向かった。私の家から関西国際空港までは両親が同伴してくれたので心配はなかった。しかし、関西国際空港からインドネシアのスカルノハッタ国際空港までは私一人で行かなければならなかったのできちんと現地にたどり着けるのかなどと不安を感じていた。私は関西国際空港からスカルノハッタ国際空港までタイ経由で向かった。なので、関西国際空港からタイのスワンナプーム国際空港、そしてスワンナプーム国際空港からスカルノハッタ国際空港と行きだけで2回飛行機に乗った。関西国際空港からスワンナプーム国際空港までは何も問題はなかった。しかし、スワンナプーム国際空港からスカルノハッタ国際空港までに問題があった。それはスワンナプーム国際空港からは日本語が使えないことだった。他国に入国したときには入国審査の紙にいろいろと記入をしないといけないのだが、それは全て英語で書かれており、どう記入をすればよいのかわからない箇所があった。そこで空港の案内所のようなところで質問したのだがそこでも英語が必要だった。非常に苦労した。本当はタイ経由だったのでわざわざタイに入国し入国審査の紙を書く必要はなく、タイに入国せずに空港のtransitというところを進めばよかったのだがそのtransitという通路が空港にあることを知らなかったので入国審査の紙をタイとインドネシアで2回書くはめになってしまった。しがし、これはこれで入国審査の紙の書き方がよくわかったので勉強になった。

私たちはスカルノハッタ国際空港からバスとタクシーでボゴール農業大学に向かった。その途中、バスとタクシーの窓から外を見ると日本とは非常に異なる風景を見ることができた。信号はほぼ全くなく、しかしバイクや車などの交通量が非常に多く、車間距離は非常に狭かった。だが驚くことに事故は全然起こっていなかった。また、道路にそって非常に多くの屋台が並んでいた。道路で商品を持って直接車などの運転手がいるところに向かいその商品売っている人もいた。こういった光景は日本では見られないので非常に新鮮さを感じた。インドネシアは暑かった。その影響によってかバスやタクシーから見た道路沿いの木は非常に高く、株や幹は非常に太かった。また、私たちはCibodas Botanical Gardenに行っておりいろいろと植物を観察したがそこにも樹高が非常に高く、株や幹は非常に太い木があった。それは1本や2本ではなく何本もあり非常に驚いた。私たちはCibodas Botanical Garden以外にNusantara Flower GardenやBogor Botanical Gardenで植物を観察した。Nusantara Flower Gardenでも多くの種類の植物を観察した。そこでは黒色をした竹を観察することができた。私は緑の竹は見慣れているが黒色をした竹は初めて見たので非常に印象深かった。竹といえば、日本では見られないがインドネシアでは竹は建物の骨組みとして使用されている。また、インドネシアにはAngklungと呼ばれる竹で作られた伝統的な楽器がある。この楽器はふることにより音になる楽器である。Bogor Botanical Gardenでは黒色ではないが緑色の非常に高い竹を観察することができた。いくつかの竹は高さが高すぎて折れ曲がりアーチ状になっていた。

国際環境マネジメントのプログラムの一環として滋賀県立大学、ボゴール農業大学のそれぞれの先生方が講義を英語で行った。しかし、専門用語だけでなく普通の単語すら意味がわからないものが多々あったので理解できなかったことがあった。しがし、英語で生物などの講義をうけることはとても有意義で貴重な体験をすることができた。

インドネシアで移動するたびに気になったのがゴミである。どこに行ってもゴミが道端に落ちていた。私たちはCibodas Botanical Gardenに行ったとき滝を見に行った。そこへ行く途中の道は非常に自然が多かったがそこにも多くのゴミが散らばっていた。バスで移動しているときバスの窓から外を見たときゴミを燃やしている人もいて驚いた。Bogor Botanical Gardenには園内に川が流れていたがそこにも少しではなく大量のゴミが捨てられていて、せつかくの自然に囲まれた景色がもったいないと感じた。

私にとってインドネシアは初めて行ったアジアだった。インドネシアでは英語だけで十分だと思っていたがそれだけでは全く十分ではなかった。英語が通じない人も多くいた。私はそこを非常にあまく見てインドネシア語のおはよう、こんにちをただけしか憶えてインドネシアに行かなかった。非常に後悔した部分である。現地で購入するとき何か買いたいと思ったとき指をさしてそれが欲しいと表現し、何個ほしいかのとき手で数字を表し

て欲しい数を表現したりしたがやはり口で直接言った方がスムーズにいくなと感じた。そして現地では私は現地の学生にインドネシア語を教えてもらいインドネシア語の数字などを覚え、実際に買い物などに生かすことができた。私たちが宿泊した学生寮では警備員のような人がいて、夜、就寝しようと部屋に戻る途中でおやすみなさいとインドネシア語で言うとその警備員のような人がおやすみなさいとインドネシア語で返答してくれてそのときはインドネシア語で少しだが会話することができたと非常に感動したのを覚えている。

この国際環境マネジメントを通じて日本とは異なる生物を観察できたり、また日本とは異なる文化を体験することができ非常に良かった。

.....

## 国際環境マネジメント 参加学生レポートⅡ

**池田 鮎美**  
人間文化学部人間関係学科

このプログラムの内容はあまりに密なもので少しと言えど文章に起こすことに私は苦労した。まず、インドネシアは気候は熱帯、赤道直下の南国。日本との環境の違いだけで私を圧倒するに十分だった。しかしそれだけではなく、世界的なイスラム教国であること、食べ物、人々の明るく朗らかな気風、その文化すべてが新鮮で一週間が長かったようにも短かったようにも感じた。ひとまず私は植物と気候に着目してインドネシアで感じたことを伝えたい。

インドネシアに降り立って2日目、ボゴール農業大学でイントロダクションと講義の後、交流会が行われた。そしてその翌日にはバスで4時間近くかけてチボダス植物園へと向かった。この植物園は標高約1,300mから1,400mの高地にある。一年を通して気温の高いインドネシアでは栽培できない世界の多様な植物が、山を丸丸使って栽培されていた。ここにラフレシアと並ぶ世界最大の花として知られているショクダイオオコンニャクがあるということを知った私達は一目見てみたいと盛り上がったが、時期が乾季であったため散ったショクダイオオコンニャクの萼と思しき部分しか見るができなかった。同じく、乾季で水が少ないため敷地内にある滝も水が滴っている雰囲気、パンフレットの写真のような瀑布を見るができなかったのが残念だった(写真1)。しかしこの後、オーストラリアから移植された巨大な針葉樹、ナンヨウスギの仲間の*Araucaria bidwillii*(和名 ヒロハノナンヨウスギ)等、本来はインドネシアに自生しない様々な植物を見ることができた。ヒロハノナンヨウスギは宿舎の近くに立っており、樹齢百年を越えるこの木は巨大で迫力があつた。そこから続く並木道にはぼつきりと折れた、もとは背の高い木だったことを思わせる株がいくつかあつた。ここでは木々は存分に水分を吸収し、平地に比べて気温が低いとはいえ常に温暖な環境で成長し続けることができる。年輪が少なく、密度の低い木は急激な成長の末に折れてしまったようだ。元来の環境と違う環境で育った植物の姿を直に見ることができた貴重な体験だった。

世界的に珍しいものを見られるといのは確かに楽しいことだが、インドネシアの何もかもが珍しい私は、世界の多様な植物よりインドネシア(というより熱帯の)特有の植物も見てみたいと感じていた。だから、その数日後に訪れたボゴール植物園で熱帯植物を見て回ったことは非常に楽しい時間だった。このボゴール植物園は大統領の別荘地に隣接しており、ぐるりと周りを巡る立派な白い塀の中には植物園、博物館、そしてインドネシア建国の偉人たちの墓地があつた。塀の外側の歩道には露天商がめいめいに店を出し、観光客にスナックだの土産物の昆虫標本だの籠に入った子ウサギだのあらゆるものを売っていた。入場した私達はまず、墓地を目指し植物園内を散策した。植わっている植物は皆、独特の存在感を持っていた。日本で見るようなしっかりと硬い幹を持つようなものは少なく、幾本もの細くしなやかな木が互いに絡み合って支え合って立っている植物や木の全長の約半分が地上に現れた根である木など様々だった。そのわきには時折、木に近づくなという看板があつた。これは脆い木が腐ったり風で折れたりすることで急に倒れてきて怪我をするかもしれないからだ。中でも「危険、ここでカップルが折れた木の下敷きになって死にました」と書かれた看板を見たときはほんとうに驚いた。そしてその看板から数メートル先の同種の木の下では、看板などなかったかのようにカップルや家族づれが涼んでいる光景がユーモラスだった。高温多雨のインドネシアでは木が腐って唐突に折れるというのはよくある事で、だから不

吉な看板を見ても誰も気に止めないのだろうか。

ここで見た植物でとりわけ印象的であったのは巨大な板根(インドネシア語でbanir)を持つ巨木Kenari Babi(英名はPig Canary)だ(写真2)。高さは見上げて他の木に阻まれててっぺんが見えず、白っぽい幹は直径4～5m程だろうか。似た木を私の知る中で挙げろと言われれば巨大なブナの木に少し似ている。しかし特筆すべきはその大きさよりも根の形状だ。私の背の倍近くある地上に表出したbanirは6本、名前の通り板のような形の根がそそり立っていた。例えるならば立てた鉛筆のそれぞれの六角に三角定規の直角部分を添わせて支えたような具合だ。私はその見慣れない形と巨大さから生まれる異様な存在感に圧倒された。

もう一つ印象的だったのはcottonwood(ヤナギの一種)だ。開けた丘の階段を上っているとき、丘の上の芝生が真っ白になっていることに気がついた。しゃがんでみるとそれは全て綿で、あまりの量にそこだけうっすら雪が降ったようだった。この綿がどこから来たのか探していると丘を降りたところにこれまた巨大な木が生えていた。この木は形自体は日本にあるものと似ているがよくよく見てみると花が咲いていたであろう部分に白い房がついている。これが全て綿のようで、風が吹くたびにその綿の一部が向かいの丘に飛ばされてきているようだ。私は綿の木といえばもっと小さいものしか見たことが無かったので、スケールの違いに驚愕した。

インドネシアでは朝8時には集合し9時にはバスに乗り出発し、午後9時、遅いときは日付が変わるまで毎日様々な施設の見学に行った。プログラムは予定表を見るだけでぎっしりと予定が書き込まれていた。このプログラムは向こうの大学側が組んでくださったものであるが、そこにインドネシアをできるだけ多くを余すことなく体感できるようにという心遣いを強く感じた。また、学生たちは常に私達より早い時間に集合し、私達と積極的に交流し、私達の質問に快く答えてくれた。私達とインドネシアの学生・チューター達の距離はだんだんと縮まり、バスの中でカラオケをしたり趣味や世間話などをするようになった。

今でもこのプログラムに参加した学生のほとんどがインドネシアの学生としばしば連絡をとりあっている。私がまたインドネシアに渡航することがあれば必ず連絡を取るだろうし、逆もまた然りだ。このプログラムは国際交流のきっかけと思いがけない新しい友人との出会いを与えてくれた。



写真1：チボダス植物園内での集合写真



写真2：Kenari Babiの巨大な板根